

そして、中国語だけを話す裕固族は、同県明花区、および酒泉県の一部に集中して分布している（〈図〉参照）。裕固族内における、これら3つの言語の話し手の比率は、それぞれ3分の1前後と推定される。シラ・ユグル（東部裕固）語はモンゴル語系であるが、サリク・ユグル（西部裕固）語はチュルク語系であり、東部と西部の裕固語は互いに系統が異なり、通じない。このように、裕固族は、互いに異系統の言語を話す、3つの言語共同体から構成されている点で、興味深い民族集団である。

歴史上、裕固族は、漢人側から、^{ナリウイグル}撒里畏兀、^{シラウイグル}錫喇畏兀兒、^{ウイグル}黄頭回鶻などとよばれ、^{ウイグル}黄番、^{ウイグル}黄韃子なる俗称でもよばれてきた。シラ [ʃra]、サリク [sarəy] は、東西の裕固語で、いずれも「黄(色)」を意味する。裕固族は、伝統的に仏教(ラマ教)を信仰してきた。

シラ・ユグル語については、前世紀末から今世紀初にかけて、ロシアの探検家ポターニン(Г.Н. Потанин)や、フィンランドのマンネルハイム(C. G. E. Mannerheim)らが、現地で記録した語彙を公刊しているが、断片的な資料にとどまる。それらと、マロフ(C. E. Малов)の未公開の調査資料を照合、整理したコトビチ(W. Kotwicz, 1939)の論文が、シラ・ユグル語研究の嚆矢とみなされる。しかし、この言語の音韻と文法の全体が明らかになったのは、1955～56年に、中国の中央民族学院、中国科学院語言研究所、内蒙文研究会が合同で行なった言語調査によってであり、その成果に基づいて、トダエワ(Тодаева, 1966)、^{ジョーナスト}照那斯图(1981)の概説が著されている。

さらに、1980年には、内蒙古大学の蒙古語文研究所が組織した「中国内のモンゴル系諸言語・諸方言の言

シラ・ユグル語 英 Shera-yögur,

露 шира югурский язык,

中 東部裕固 (Dōngbùyùgù), 西拉裕固 (Xīlāyùgù)

【概況】 中国、甘肅省、^{ユグル}肅南裕固族自治県の東部に居住する裕固族によって話されているモンゴル語系の言語。話者数は、推定で3千～4千人。固有の文字をもたず、書記には、漢字(中国語)を用いる。

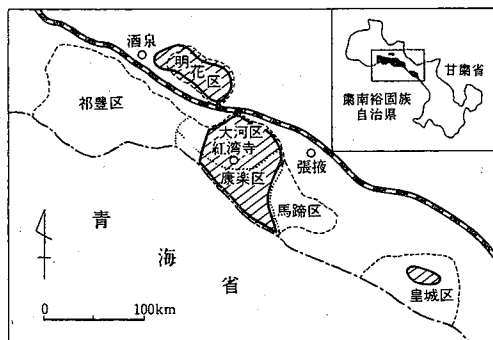
この言語の話し手は、自身の言語を^{アングル}恩格爾語[anger lar]、あるいは、裕固語[jəwər lar]とよぶ。シラ・ユグル[ʃra jəwər]は、民族名としての自称であるが、慣用的に、言語名としても用いられている。

裕固族の人口は、1982年の中国の統計で、10,568人となっているが、これは、言語的には、次の3つの言語の話し手からなる。

- 1) モンゴル語系のシラ・ユグル語(東部裕固語)
- 2) チュルク語系のサリク・ユグル語(西部裕固語、^{ヤオフル}尧乎爾語ともいう)
- 3) 中国語のみ

シラ・ユグル(東部裕固)語の話し手は、^{ユグル}肅南裕固族自治県東部の康楽区および皇城区に、サリク・ユグル(西部裕固)語の話し手は、その西の大河区と明花区に、

〈図〉 裕固族主要分布地域



出典：『裕固族簡史』(1983)および『肅南裕固族自治県概況』(1984)による。

- 注：1) 肅南裕固族自治県は、祁豊、大河、康楽、馬蹄、明花、皇城の6区からなる(明花、皇城の2区は飛び地)。
- 2) 〇で示した地域は、大河、康楽両区の大部分、明花区およびその西方隣接域(酒泉県)と、皇城区の一部である。

語調査」の一環として、ボロチョロー(保朝魯)らによって、シラ・ユグル語の組織的な調査が行なわれ、それに基づいて、約3千項目を含む、初めての本格的な語彙集(保朝魯等編, 1985)が公刊された。

【言語特徴】 モンゴル系諸言語中における、シラ・ユグル語の位置づけをみると、一面では、中国甘肅省、青海省に分布する、^{トウ}モンゴル(土族)語、^{バオアン}保安語、^{ドウナンヤン}東郷語との類似的な特徴が目立つ。とはいえ、その類似性の程度は、上記3言語の相互間の緊密さほどではなく、それらと離れて、内蒙古語やハルハ・モンゴル語等との共通の特徴も少なくない。要するに、シラ・ユグル語は、モンゴル語等のグループとハルハ・モンゴル語等のグループの中間的位置を占めているということができる。

シラ・ユグル語の目立った音声的特徴として、モンゴル語等のグループと共通しているのは、次の点である。

- 1) 語の強勢が、常に語末音節の母音にある。
- 2) これに関連して、若干の語で語頭音節の母音が脱落した。

蒙古文語形	シラ・ユグル語形		
imaγan	mān	「山羊」	
ebed-	wed-	「痛む」	
3) また、これにより、語頭に子音連続が現われる。			
kökü(n)	hkön	「乳房」	
sīdü(n)	šdän	「歯」	
4) ハルハ・モンゴル語等、多くの現代諸方言で完全に消失した語頭の無声摩擦音が、h として保持されている。			
中世蒙古語形	シラ・ユグル語形	ハルハ・モンゴル語形	
harban	harban	arāb	「10」
hiče-	htše-	itš-	「恥じる」
hon	hon	oŋ	「年」
hüker	hgör	üxür	「牛」

これに対して、次の点では、モンゴル語等のグループより、むしろハルハ・モンゴル語等に近い。

- 5) 短母音と長母音の対立がある(モンゴル語民和方言、保安語大河家方言、および東郷語には、母音の長短の対立がない)。
 - tabən 「50」 — tābən 「5」
 - temen 「万」 — temēn 「駱駝」
 - džun 「夏」 — džūn 「100」
 - xoro 「毒」 — xorō- 「包む」
 - tölö- 「賠償する」 — tölō 「(～)のために」
- 6) 後舌円唇母音に加えて、前舌円唇母音 ü(=[y]), ö(=[ø])の系列がある。

- 7) 母音調和が接尾辞にまで及び、多くの接尾辞が母音の交替による異形態をもつ。
 - gar 「手」 — garār 「手で(造格)」
 - ger 「家」 — gerēr 「家で(造格)」
 - mōrə 「馬」 — mōrōr 「馬で(造格)」
 - ōr 「暁」 — ōrōr 「暁に(造格)」

8) š, tš, dž ([ʃ, tʃ, tʃ]) に対応する捲舌音の系列 š, tš, dž ([s, tʂ, tʂ]) は、固有語の発音には現われない。

文法・形態面では、シラ・ユグル語の次のような特徴は、モンゴル語等と合致または類似している。

- 1) 名詞の属格形と対格形が融合して、同形となっている。
 - məla 「子供」 — mēlin 「子供の; 子供を」
 - mōrə 「馬」 — mōrin 「馬の; 馬を」
- 2) 動詞の条件副動詞の接尾辞 -sa⁴ (右肩の数字については、「母音調和」を参照)を用いる。
 - ab- 「取る」 — absa 「取れば」
 - edže- 「見る」 — edžese 「見れば」
- 3) 動詞の目的副動詞の接尾辞 -la⁴ を用いる。
 - ab- 「取る」 — abla 「取りに」
 - džolGo- 「会う」 — džolGolo 「会いに」

他方、シラ・ユグル語の次のような特徴は、モンゴル語等にはみられず、ハルハ・モンゴル語等と共通である。

- 4) 動詞の受動態形成接尾辞 -gda-, -gde- を用いる(後述)。
- 5) 動詞の習慣形動詞形成接尾辞 -dag⁴ を用いる。
 - adla- 「放牧する」 — adladag 「(しばしば)放牧する」
 - mede- 「知る」 — mededeg 「(よく)知っている」

【音韻体系】 母音は、i, e, a, o, ö, u, ö, ü, ʉ, ə の10の体系からなる。

ü, ö, ó, o, a は、IPA の表記では、それぞれ [y, ø, o, ɔ, a] であり、他は、IPA の音価に近い。母音体系は、表1のようにまとめることができる。

〈表1〉 シラ・ユグル語の母音体系

	(前舌)		(中舌)	(後舌)	
	非円唇	円唇		非円唇	円唇
狭	i	ü	ʉ		u
中	e	ö	ə		ó
広				a	o

中舌の ʉ は円唇母音、ə は非円唇母音である。

長母音は、それぞれの短母音に対応する10種類(i, ē, ā, ō, ö, ū, ő, ü, ʉ, ē)があるが、このうち、ö, ū, ő の現われる例は少ない。

二重母音は、ei, ai, oi, ui, ūi, əi がある。いずれも、i を音節副音とする降り二重母音である。中国語からの借用語には、ia, ie, ua, ao, iao 等の重母音も用いられる。

子音は、固有語の発音に用いられる、p, t, k, q; b, d, g, G; s, š, x, h; tš, dž; w, j; r, l; m, n, ŋ の21に加えて、主として中国語からの借用語にだけ現われる ts, dz; tš, dž; z, š, ž がある。

上のうち、š, tš, dž; ž, ž, tš, dž は、IPA 表記では、それぞれ [ʃ, tʃ, dʒ; ʒ, ʒ, tʃ, dʒ] となる。

また、p, t, k, q; tš: (ts, tš) は、無声有気音の系列、b, d, g, G; dž: (dz, dž) は、無声無気音の系列である。

条件的な変異として注意すべきものに、b, g, G がある。これらは、語頭、語末では閉鎖音 [p, k, q] であるが、語中では摩擦音 [w, ɣ, ʁ] として現われる。

r は、舌先のふるえ音 [r] としても、また、閉鎖音や破擦音の前で摩擦音 [ɹ] としても現われる。

特殊な発音として、強い息が鼻孔から抜ける無声鼻音 [ŋ] と、側面無声摩擦音 [ɬ] があるが、これらは、音韻的には、/hn/ /hl/ とみなすことができる。

hni- [ni:] 「笑う」

hlān [ɬan] 「赤い」

音節構造の一般的な型は、母音を V、子音を C とすれば、(C)(C)V(C) で表わすことができる(カッコ内は、任意的な要素)。ただし、語頭以外(第2音節以降)の音節の構造はさらに単純で、母音で始まる型や音節頭に2つの子音がたつ型がなく、必ず1つの子音で始まるので、CV(C) で表わされる。

語頭の子音連結は種類が多い。よくみられる型としては、摩擦音 h, s, š と閉鎖音 b, t, d, k, g, q, G, tš, dž の結合、鼻音と対応する閉鎖音の結合(mb-, nd-, ŋG-); š+(n, l, r, ŋ); tš+(k, g, G, l); sr-, hs-, mtš- 等の結合がある。

htor 「内部」、htše- 「恥じる」、sbəd 「真珠」、sdāsən 「糸、血管」、mba- 「泳ぐ」、ndaGAR 「誓い」、tškən 「耳」、hsun 「毛、乳」、sra- 「養う」

特殊な構造の音節として、hrbai 「はだか麦」、hrtša 「柏」、kšgə- 「踏む」のように、語頭に3つの子音が現われることがある。

語の強勢は、上述のように、規則的に語末の音節の母音におかれる。

【母音調和】 シラ・ユグル語の母音は、次のように、男性、女性、中性の3類に分かれる。

男性母音 a (ā, ai), u (ū, ui), o (ō, oi)

女性母音 e (ē), ö (ö), ó (ō), u (ū, ui)

中性母音 ə (ē, əi), i (ī), ü (ū), ei

原則として、男性母音と女性母音は、1語中に共起し

ない。中性母音は、男性、女性いずれの母音とも1語中に現われうる。

e, ē が女性母音であるのに対し、二重母音 ei は、keiman 「軟弱な」や neiman (～neiman) 「8」のように、男性母音とともに現われることが多い(女性母音とともに現われるのは、ugwei (～ugui) 「ない」を除いてまれである)。

母音調和の原則は、söjō (～sojō) 「牙」、nejan (～najan) 「80」等、若干の語や外来語において破られることがある。以下に、外来語の例をあげる。

medog 「花」、mōloŋ 「馬の鞍座の釘」、mtšorten 「塔」(いずれもチベット語からの借用語)

母音調和は接尾辞にも及び、接尾辞のうちには、語幹の母音によって、a~o~ö~e, a~e, ü~ū のように、母音交替による異形態をもつものがある。語幹の母音と接尾辞の母音交替との関係を、表2に示す。

〈表2〉 接尾辞の母音調和

	語幹の母音	接尾辞の母音
男	a u	} a } a } ü
性	o	
女	ö	} ö } e } ü
性	e ü ó u	
中性	ə i	

これら、接尾辞における、a~o~ö~e, ā~ō~ö~ē の4種類の母音交替を、a', ā' のように表わし、a~e および ü~ū の母音交替は、a/e, ü/ū のように表わすことにする。

なお、再帰所属語尾の -jān, 動詞意志形語尾の -ja, 容認形語尾の -gani 等、交替形をもたず、したがって、このままの形で女性母音をもつ語幹にも接尾する語尾がある。

【文法】 シラ・ユグル語では、文法的な語形変化も派生的な語形変化も、語幹にさまざまな接尾辞がつくことによって実現される。語形変化に際して、語幹の交替は、一部の代名詞にみられるほかは、ない。他方、語形変化に際して、一般にみられる音変化の現象としては、語幹末の短母音は、母音で始まる接尾辞が接尾する際に脱落し、名詞、形容詞の語幹末の子音 n は、派生接尾辞や複数接尾辞がつくときに消失する。

語幹末の短母音が消失する例：

mōrə 「馬」+in — mōrīn 「馬の、馬を」

mede- 「知る」+ül — medül- 「知らせる」

語幹末の子音 n が消失する例：

bəjan 「富んだ」+dža — bəjadža- 「富む」

tarGan 「太った」+la — tarGala- 「太る」

名詞類には、1) 複数、2) 格、3) 所属、の変化

があり、それぞれ、次のような接尾辞で表わされる。

- 1) 複数語尾: -s (母音, n で終わる語幹につく)
 -əs (n 以外の子音で終わる語幹につく)
 mēla 「子供」+s — mēlas 「子供たち」
 kun 「人」 — kus 「人々」
 xainaG 「ハイナク(ヤクと牛の雑種)」+əs —
 xainaGəs 「同(複数)」

このほか、人を表わす名詞につく -ti, -dud といった複数語尾もあるが、使用頻度は低い。

- duidžan 「隊長」+ti — duidžanti 「隊長たち」
 nion 「官吏」+dud — niodud 「官吏たち」

2) 格語尾

主 格: -φ (ゼロ)

mēla 「子供が(は)」

属・対格: -ə (子音で終わる語幹に)

-in (短母音で終わる語幹に)

-n (長母音, 二重母音で終わる語幹に)

- kun 「人」+ə — kunə 「人の, 人を」
 mēla 「子供」+in — mēlin 「子供の, 子供を」
 ski 「フェルト」+n — skīn 「フェルトの(を)」

与位格: -də~tə

mēla 「子供」+də — mēladə 「子供に」

奪 格: -sa⁴

mēla 「子供」+sa — mēlasa 「子供から」

造 格: -ār⁴ (子音, 母音 ə で終わる語幹に)

-gār⁴ (ə 以外の母音で終わる語幹に)

- gar 「手」+ār — garār 「手で」
 mōrə 「馬」+ōr — mōrōr 「馬で」
 mēla 「子供」+gār — mēlagār 「子供で」

連合格: -la/-le

mēla 「子供」+la — mēlala 「子供と」

共同格: -di

mēla 「子供」+di — mēladi 「子供を連れて」

このほか、名詞が語幹形のままで動詞の目的語となることがしばしばあるが、これを「不定格」とよぶ。不定格は、一般的な、特定化されていない目的語を表わす際に用いられる。

- tša ū- 「茶を飲む」(tša 「茶」)
 qusun ū- 「水を飲む」(qusun 「水」)
 dūn dūla- 「歌を歌う」(dūn 「歌」)

3) 所属語尾には、a) 再帰所属語尾と、b) 人称所属語尾の2つがある。

a) 再帰所属語尾は、事物がその文の主語たる人物に所属していることを表わし、「自分の、～自身の」と訳しうる。接尾辞は、-ān⁴。

- gertə+ēn — gertēn
 「家に」(与位格) 「自分の家に」
 babasa+ān — babasān

「叔父から」(奪格) 「自分の叔父から」

torGOGōr+ōn — torGOGōrōn

「絹で」(造格) 「自分の絹で」

ただし、属・対格の再帰所属形は、名詞の語幹に直接 -ān⁴; -jān をつける (-jān は、短母音で終わる語幹につき、母音調和にしたがわない)。

gar+ān — garān

「手」 「自分の手を(の)」

žənwu+jān — žənwujān

「任務」 「自分の任務を(の)」

b) 人称所属の「語尾」と認められるものは、第3人称のものに限られる。第1・第2人称の所属を表わす mənə 「私の」、manə 「私たちの」、tšənə 「君の」、tanə 「君たちの」は、名詞の後におかれる場合も、発音上、独立した語としての性格をもち、形の上でも人称代名詞の属格形に等しい。

第3人称の所属語尾は、次のとおりである。

i) -nə (主格形, 造格形につく)

ii) -ə (-n, -in をもつ属・対格形につく)

iii) -inə (その他につく)

mōrə+nə — mōrənə

「馬が」(主格) 「彼の馬が」

mōrin+ə — mōrinə

「馬を(の)」(属・対格) 「彼の馬を(の)」

garsa+inə — garsinə

「手から」(奪格) 「彼の手から」

人称代名詞は、名詞と同じ格語尾をとるが、第1人称と第2人称の単数で、属格と対格を形の上で区別する点、また、格変化に際して語幹形が交替する点が特殊である(表3)。

また、第1人称複数形に、聞き手を含まない排除形 buda (斜格形の語幹は budan-) と、聞き手を含む包括形 budas (斜格形語幹も同形) の区別があり、第2人称複数形に ta (斜格形語幹 tan-) は、単数の尊称としても用いられる。

	第1人称複数 排除形	第2人称複数 包括形	
主格形	buda	budas	ta
斜格形語幹	budan-	budas-	tan-

第3人称代名詞には、次に述べる近称、遠称の指示代名詞が代用されるほか、ergen 「彼」も用いられる。指示代名詞には、近称(「これ、これら」と遠称(「あれ、あれら」)の2種類がある(表4)。

数詞は、1万未満を固有語で表わす。

- 「1」 nege, 「2」 gūr, 「3」 Gurban, 「4」 dōrben, 「5」 tābən, 「6」 džirgūn, 「7」 dolōn, 「8」 neiman~neiman, 「9」 xisən, 「10」 har-

〈表 3〉 人称代名詞 (単数 1・2 人称)

	第 1 人称	第 2 人称
主 格	bu	tšə
属 格	mən-ə	tšən-ə
対 格	nam-in	tšəm-in
与位格	nan-da	tšəma-də
奪 格	nanda-sa	tšəma-sa
造 格	nanda-gār	tšəma-gār
連合格	nanda-la	tšəma-la
共同格	nanda-di	tšəma-di

〈表 4〉 指示代名詞

	近 称		遠 称	
	(単数)	(複数)	(単数)	(複数)
主 格	ene	enes	tere	teres
斜格形語幹	un-	enes-	tun-	teres-

ban, 「20」 xorən, 「30」 gutšən, 「40」 dötšən, 「50」 tabən, 「60」 džiran, 「70」 dalan, 「80」 nejan~najan, 「90」 jeren, 「100」 džün, 「1,000」 məŋgan, 「10,000」 temen

合成数詞の例:

Gurban məŋgan dörben džün tabən džirGün

三 千 四 百 五 十 六

動詞の活用語尾は、文中でははたらきと意味によって、1) 命令形, 2) 終止形, 3) 形動詞形, 4) 副動詞形, の 4 類に分類される。それぞれの語尾の形と意味は、次のとおりである。

〈動詞語幹: edže-「見る」〉

1) 命令形 ここに命令形としてまとめた活用語尾は、第 2 人称に対する「命令」(「~しろ」)だけでなく、第 1 人称の「意志」(「~しよう」)や、第 3 人称の主語が行為を遂行することに対する「容認」(「~するがままにしておけ」)、さらに、行為が遂行されることを「希求」する意味(「~したらいいなあ」)を表わすものも含まれる。禁止は、命令形の前に putə「~するな」をおいて表わす。

命令	-φ(ゼロ)	edže「見ろ」
意志	-ja	edže-ja「見よう」
容認	-gani	edže-gani「見るにまかせよ」
希求	-sa'	edže-se「見たらなあ」

2) 終止形 終止形は時制を表わし、言い切りの形で文の述語となる。疑問の助詞 u「~か」をとるが、その際、現在・未来時制では、下記の(1)と(2)に関わりなく、-nam' u? という形になる。

edže-nem u? 「見ますか?」

否定は、活用形の前に, lə をおいて表わす。

過去 -ba/-be edže-be「見た」

現在・未来 (1)

-ni edže-ni「見ます」
(~namna' edže-nemne)

現在・未来 (2)

-na' edže-ne「見ます」
(-nai edže-nai)

3) 形動詞形 形動詞形は、動詞として他の語句を支配するはたらきを失うことなく、同時に、a) 名詞を修飾する形容詞的なはたらきと、b) 「~する(した)こと」等の意味で、それ自体が格語尾をとって曲用変化する名詞的なはたらきをもつ。陳述の助詞 bai, be (後述)とともに、述語として文を終止させることがある。否定は、活用形の前に, lə をおいて表わす。

完了 -(G)san' edže-(g)sen「見た~」

一般 -ma/-me edže-me「見ること, 見たこと」

習慣 -dag' edže-deg「(いつも)見る~」

持続 -Gə edže-gə「見ている~」

子音 G は、女性、中性の母音をもつ語では g と交替する。

4) 副動詞形 副動詞形は、動詞として他の語句を支配するはたらきを失うことなく、同時に、他の動詞等を修飾する副詞的なはたらきをもつ。重文で等位節の述語となって文を中止したり、複文で従属節の述語となって主文に連なることができる。否定は、活用形の前に, lə をおいて表わす。

連合 -(ə)n edže-n「見, ...」

並列 -džə edže-džə「見て...」

分離 -(G)a' edže-ge「見て(から)...」

条件 -sa' edže-se「見れば」

譲歩 -sa'da edže-seda「見ても...」

選択 -Ginə edže-ginə「見るより...」

限界 -dala' edže-dele「見るまで...」

継続 -(G)sār' edže-(g)sār「見ながら...」

即刻 -maGdžə' edže-megdžə「見るや...」

目的 -la' edže-le「見るために...」

連合副動詞の ə は子音で終わる語幹に、分離副動詞の G (g) は母音で終わる語幹につく際に現われる。完了形動詞と継続副動詞の G (g) は、母音で終わる語幹に接尾する際に現われることがある。

命令形の -ja, -gani, 副動詞の -sa'da (da の母音が不変)が、母音調和に従わない点に注意されたい。

シラ・ユグル語では、動詞が語幹形で後続の動詞と結びつくことがある。この場合、動詞の語幹形は、一種の副動詞と見なすことができる。動詞の語幹形を支配するのは、

šda-「~することができる」

jida-「~することができない」

bar- 「～してみる」

sū- 「(座って)～する, ～している」

等の補助動詞である。

largə šda- 「話すことができる」

ere jida- 「来られない」

ēr bar- 「捜してみる」

nād sū- 「(座って)遊んでいる」

動詞の態 (voice) には, 使役, 受動, 衆動の3つがある。

1) 使役態形成接尾辞: -ül-/üil-; -lga-/lge-; -ga/-ge-

mede- 「知る」—— medül- 「知らせる」

nā- 「くっつく」—— nālga- 「貼る」

tenī- 「伸びる」—— tenilge- 「伸ばす」

gar- 「出る」—— garga- 「出す」

edže- 「見る」—— edžege- 「見せる」

2) 受動態形成接尾辞: -gda-/gde-

darə- 「圧迫する」—— darəgda- 「圧迫される」

3) 衆動態形成接尾辞: -ld-

mörgə- 「ぶつかる」—— mörgəld- 「ぶつかり合う」

【統 辞】 語順は, 原則として, 従属的な語句がそれを受ける語句の前に位置する。

文は, 述語を中心に構成される。述語は文に不可欠の要素であるが, 主語, 目的語等は, 述語の前に位置し, 述語を修飾する従属的な成分とみなしうる。述語にかかる文成分は適宜省略され, それら相互の語順も比較的自由であるが, もっとも一般的な語順は, 主語-目的語-述語である。このように, 語順は, 日本語と比べて類似している。

禁止の副詞 *putə* と打ち消しの副詞 *lə* は, 動詞活用形の前におかれる。

putə gə

(否定) しろ

「するな」

lə ere-se lə ere-gani

(否定) 来る-なら (否定) 来るがいい

「来ないなら, 来ないままにしておけ」

lə jabə-san mör

(否定) 行った 道

「行ったことのない道」

シラ・ユグル語では, モンゴール語や保安語と同様, 叙述内容を話し手の経験内のことがらとして表現するか, 話し手の経験外の事実として表現するかによって, 異なった陳述形式が用いられる。このはたらきを担うのは, 文末助詞の *be* と *bai* である。*be* は, 話し手の経験内の熟知のことがらとして事実を述べ, *bai* は話し手の経験, 主観から離れて客観的にことがらを述

べる。

bu joGor kun be, tere qutad kun bai.

私はユグル人です, 彼は中国人です

bu lə mededeg be. 「私は知りません」

tere tanə bai. 「あれはあなたのものだ」

ken bai? 「誰ですか」—— *bu be.* 「私です」

【語 彙】 陳乃雄(1988)によれば, 1980年の調査

で収集されたシラ・ユグル語の語彙2,553語のうち, 借用語の占める割合は16.8%であり, その内訳は, 中国語からのもの9.6%, チュルク系のもの4.6%, チベット語からのもの2.6%となっている。調査語彙全体のうち, 上の借用語を除く, 残りの83.2%はモンゴル語系とみなされるが, これには, 他のモンゴル語系諸言語にはみられず, シラ・ユグル語に特有の語彙とされるもの24.4%が含まれる。

次のような語彙は, シラ・ユグル語に特有なものに数えられる。

シラ・ユグル語		蒙古文語形
GojGor	「尻」	bögse(n)
bodo	「鹿」	buγu
oŋloG	「容易な」	kilbar
honə-	「飛ぶ」	nis-
hanə-	「行く」	oči-
bala	「卵」	öndög
tšagtaGai	「頬」	qačar
usqa-	「ののしる」	qariya-
qusun	「水」	usu(n)
pile-	「吹く」	üliye-

これと並んで目立つのは, 基本的な語彙にみられるサリク・ユグル(西部裕固)語と共通の単語である。

シラ・ユグル語		サリク・ユグル語
bulad	「雲」	bəlet
džogGoi-	「座る」	tšogə-
gərwəg	「眉」	gərmək
keŋdžir	「麻」	kemdžir
lar	「言葉」	lar
məla	「子供」	mula
meneg	「お金」	menek
məŋəi	「脳」	muŋe
ordžo	「物」	ördgzy
šad	「子牛」	šat

中国語からの借用語は, 特に, 現代生活に関連した分野の用語に多い。

šandian (<商店 shāng diàn) 「商店」

guŋtšəŋ (<工廠 gōng chǎng) 「工場」

denjəŋ (<電影 diàn yǐng) 「映画」

仏教徒として, チベットとの密接な関係を反映して, チベット語からの借用語もみられる。

- medog (<me-dog) 「花」
 mtšorten (<mè'o-rten) 「天堂, 塔」
 lhabdzo (<lha-bzo) 「画家」
 šog (<pyogs) 「方向」

【参考文献】

- Kotwicz, W. (1939), *La langue mongole, parlée par les Ouïgours Jaunes près de Kantscheou. D'après les matériaux recueillis par S. E. Malov et autres voyageurs* (Druk. "Krajowa", Wilno)
- Mannerheim, C. G. E. (1911-12), "A visit to the Sarö and Shera Yögurs", *Journal de la Société Finno-Ougrienne* 27(2) (Helsinki)
- Потанин, Г. Н. (1893), *Тангутско-тибетская окраина Китая и Центральная Монголия. Путешествие Г. Н. Потанина 1884-1886*, т. II (Санкт-Петербург)
- Толаева, Б. Х. (1966), "Язык шира югуров", Э. Р. Тенишев и Б. Х. Толаева, *Язык желтых уйгуров* (Москва)
- 照那斯图 (1981), 『東部裕固語簡志』(中国少数民族語言簡志叢書, 民族出版社, 北京)
- 保朝魯 (1982), 「關於西拉裕固語的元音和諧和円唇音」『內蒙古大學學報, 哲學社會科學 蒙文版』1982年第1期 (呼和浩特)
- (1986), 「東部裕固語與蒙古語間長元音對應關係」『內蒙古大學學報, 哲學社會科學 蒙文版』1986年第4期
- 陳乃雄 (1988), 「蒙古語族語言的詞彙」『內蒙古大學學報, 哲學社會科學版』1988年第1期
- 保朝魯 等編 (1985), 『東部裕固語詞彙』(蒙古語族語言方言研究叢書 017, 內蒙古人民出版社, 呼和浩特)
- 保朝魯, 賈拉森編 (1988), 『東部裕固語話語材料』(蒙古語族語言方言研究叢書 018)
- 栗林均編 (1987), 『「東部裕固語詞彙」蒙古文語索引』(東京外國語大學, 東京)
- 【參照】 モンゴル諸語, シロンゴル・モンゴル語, サリグ・ヨグル(西部裕固)語

(栗林 均)